

Title	CLIL 授業を創る : 公立小学校教員研修の現場から
Author(s)	藤原, 真知子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :13-17
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5759
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

CLIL 授業を創る — 公立小学校教員研修の現場から —

藤原 真知子

はじめに

英語を母語としない欧州諸国で、教科の内容と英語という言葉と同時に学ぶ内容言語統合型学習 (CLIL: Content and Language Integrated Learning) に取り組む教師が増えている。当初、その導入に困難が予想された日本でも、教科内容を部分的に英語で学ぶ形でCLILが普及しつつある¹⁾。

筆者自身、生活科・理科・社会・家庭科などの教科内容を聖学院小学校の英語授業に取り入れ、公立小学校5・6年生の外国語(英語)活動の中でも同様の取り組みを行ってきた(藤原・相羽, 2015)。また一方で、聖学院大学小学校英語指導者養成講座をはじめとする小学校英語指導研修の機会にCLILを紹介している。

2015年8月19・20日には、千葉県船橋市教育委員会の主催する「平成27年度小学校英語指導研修会」において、公立小学校の担任教師が小学校の外国語活動の中でCLIL的な実践を行うための研修を、東京電機大学の相羽千州子先生と共同で実施した。

研修1日目午前はCLILとは何かの講義を行い、午後は私立・公立小学校でのCLIL実践を紹介した後、参加者の先生方に児童になったつもりでCLILレッスンを体験してもらった。

研修2日目、参加者45名(ALT4名を含む)は午前、8つのグループに分かれて、小学校3年の社会科で学ぶ地図記号を取り入れたCLIL授業のレッスンプラン作りに取り組み、同日午後、10分程度のデモレッスンを披露した。ALTは、1人が2グループ受け持った。

本稿では、デモレッスンの模様を報告し、日本の公立小学校の学級担任が創るCLIL授業について考える手がかりとしたい。

参加者によるデモレッスン

CLILは、内容(Content)、コミュニケーション(Communication)、認知(Cognition)、文化(Culture/Community)の4Cの要素で構成される(Coyle, Hood, & Marsh, 2010)。グループ(A~H)による8つのデモレッスンは、自分の住む町と地図記号という出発点は同じだったが、どの要素に焦点を当てるかに着目すると、多様性に富んでいることがわかる。ここでは、コミュニケーションの広がりや方法によって、3タイプに分けた。

なお児童は地図記号の言い方を前の時間に学んだことになっている。教師の英語は、ALTの助けを得ている。

(1) 教師と児童のコミュニケーション

グループA~Cは、いずれも教師と児童のコミュニケーションを重視しているが、認知の要求度はA→Cの順に高くなる。

[グループA] 地図上の3か所を訪問し、場所に関連した英語を学ぶ。

- T: Let's go to the Hokubu Recycle Plant.
Ss: Let's go to the Hokubu Recycle Plant.
T: What do they do here?
S: ごみを燃やしています。
T: ここではごみを燃やして処理しています。
Burn trash.
Ss: Burn trash.

最後に応答形式で学んだ英語をまとめる。

- T: Where did we go?
Ss: The Hokubu Recycle Plant.
T: What do they do?

Ss: Burn trash.

[グループB] 児童は、自分のいる位置から見えるものを、地図上の地図記号で探す。

T: We are at Sogokyoiku center. What can you see?

S: I can see school.

ALT: I can see a school.

T: What else can you see?

S: I can see shrine.

ALT: I can see a shrine. Very Good.

ALTは児童の英語にフィードバックを与える役割を担う。

[グループC] 地図記号を復習した後、地図記号の由来を考えさせ、ALTに英語で教えてもらう。

T: What's this?

Ss: Field.

T: よく覚えているね。(地図記号を見せながら) What does this mean?

S: V. (筆者注: V字マークの意味)

T: なんだろうね。

ALT: It means sprout. (筆者注: 芽の意味)

Ss: Sprout.

この後、船橋の地図記号から、アメリカの地図記号の由来(消防署のFire Stationなど)へ展開する。

(2) 歌による語彙の定着

グループDとグループEは、教師と児童のコミュニケーションで導入した語彙を、歌を歌わせてクラス全体に広げていく。内容の面でも、船橋中の地域(南・北・中央)と特徴的な地図記号を結びつける点では共通している。

[グループD] 特定の地図記号の多さから、南北の産業の違いに気づかせる。

T: (地図をスクリーンに映しながら) この地図記号(工場)は船橋のどの辺にあるかな。

Ss: 海の方/下の方。

T: じゃあ、下の方は(ALTの方を向いて) In English, please.

ALT: South Funabashi

導入した語彙を童謡「カエルの歌」の替え歌で定着させる。

Where is the factory?

Where is the factory?

South, South, South, South

South, South, South, South, Funabashi

この後、ふりをつけて歌わせた。

[グループE] 地域ごとに教師と児童がやりとりしながら、特産品を英語で言っていく。出てきた特産品を歌にしていく。

T: (地図記号を示しながら) Can you find this mark?

S: (頷く)

S: はたけ。

T: In English, please

S: Filed.

T: Field. Very Good.

T: Do you see many fields?

Ss: Yes.

T: How many?

Ss: Oh. Many. (laughing)

T: はたけ沢山ありますね。何を育てているのでしょうか。(船橋市)

S: にんじん。

T : In English, please.
 S : Carrots.
 T : Good pronunciation.
 T : Repeat after me. Carrots.
 Ss : Carrots.
 T : Anything else?
 S : Kabu.
 T : Oh, Kabu. Very good. ... Turnips.
 Ss : Turnips.

「ロンドン橋」の節に合わせて、このやりとりからできた次の歌詞を歌う。

Many many fields of carrots,
 Fields of Komatsuna, fields of edamame,
 Many many fields of turnips
 In the north of Funabashi

(3) ペア／グループワーク

グループF～Hは、グループワーク、ペアワークの形でコミュニケーションをクラス全体に広げようとしている。

[グループF] 地図記号の復習、語彙 (get on /off the train, North, East, South West) の導入につづいて、道順の言い方を教師と児童のやり取りの中で教える。

T : How can I go to Sogokyoiku Center?
 S : Walk.
 T : No. I cannot walk.
 S : Train.
 T : Train. Which station?
 S : Higashi Funabashi station.
 T : So, get on the train at Funabashi station, get off the train at Higashi Funabashi station.
 Ss : Get on the train at Funabashi station, get

off at Higashi Funabashi station.

T : Then, which way do we walk?
 Ss : (上を指さしながら) North.
 T : North. OK. I can go to Sogokyoiku Center.
 Thank you. Great.

このあと、目的地を書いた問題のカードを配る。一つのグループが目的地への行き方を英語で説明する。他のグループの児童は、地図を辿って、目的地を探す。

[グループG] ビンゴゲームで地図記号を復習し、Bingo!になった児童は、3種類の特産品 (carrot, edamame, mustard spinach) の書かれた絵カードをもらう。

T : この3つは、何の仲間か。同じところは何か。グループで話し合ってください。

S1 : 野菜。緑黄色野菜。

T : それだけではありません。グループで話し合ってください。

S2 : 船橋市生産高ナンバーワン、ツー、スリー。

T : はい。そのほかにもまだもう一つ名産品があるんですけど。

S3 : Pear!

T : Pear. Very Good. (フナッシーとなしの絵が出てくる)

T : pearがあるところを地図記号で探したいんですけど、それではどの地図記号で探したらいいですか。

S4 : Orchard.

T : Good. こっちの地図記号は何になるんでしょうか。(carrotとedamameを指さしながら)

S5 : Field.

T : Yes.じゃあ、これらの記号を地図を使って探してみてください。

[グループH] 初めに、地図記号の英語をALTのあとについてレポートして復習し、地図記号カードを児童に1枚ずつ渡す。

続いて、同じ地図記号を持つ相手を探し、ペアで次の会話をする（会話はスクリーンに映す）。

A : Excuse me, I want to go to _____. Do you want to go?

B : Yes. Let's go! (同じマークのとき。ハイタッチ)

No, I want to go to _____. See you. (ちがうマークのとき)

同じマークの人とペアになって教室の端に座る。全員が座ったら、ALTがマークを読み上げ、ペアで手を挙げる。

最後に、マークの数が船橋市の地図の中の地図記号の数を反映していることを伝える。

ふり返り

1. いずれのグループも船橋市の地図、またはそこに出てくる地図記号から独自に発想し、オリジナルの教材をつくっていた。オーセンティックな教材の強みを感じられる。困難もあったが、教師自身の楽しみもある。

2. 公立小学校の教師は、意味のあるアクティビティを構想する力、教室の児童とのコミュニケーションに優れている（児童の発話を単純に否定するのではなく、いったん、引き受けてユーモアに変えるなど）。

3. 認知はCLILの特徴の一つである。地図記号を探す、同じ記号を探す、地図を読む、地図記号の由来を考えるなど、具体的な活動をともなって、思考力を高めようとしている。地図を媒介にして獲得される知識もFactual（記号の意味、特産品）/Conceptual（分類）/Procedural（順番）からなど多岐にわたっている（Coyle et al., 2010, p.31）。歌や身振りは、知識や思考を身体化し、いっそう豊かなものに変えている。

4. Cultureやcommunityを創る活動として、クラス全体の活動が機能している。一緒に歌を歌う活動もその一つである。

5. ALTの役割：授業では、発音の模範を示す役割から、児童の発話を評価（Very Good / No）、訂正（I can see a shrine）するなど、フィードバックを与える役割、さらに、知識を与える役割（It means sprout）など多様な役割を担う。レッスンプランの作成段階では、会話のSCRIPTや英語の歌詞を書くときなど、言語面で日本人教師を支援した。自身が日本の遊びに親しむ機会にもなったようである。

アンケート結果

この教員研修の2日目にCLILのアンケートを実施し、42名から回答を得た。「この研修の前にCLIL（内容言語統合型学習）という言葉を知っていましたか」という問いに対し、40名が「知らなかった」、2名が「少し知っていた」と回答していることから、ほとんどの教員がCLILを知らなかったことがわかる。しかし、「今後、CLILを外国語活動に取り入れてみたいと思いますか」という問いに対し、40名が「取り入れてみたい・できれば取り入れてみたい」と回答した。この結果から、今回この教員研修に参加した教員のほとんどが今後、CLILを実践したいと感じていることがわかった。

おわりに

デモレッスンは想像以上に活気があった。教師になじみのある題材を新たな視点で考えることができた。また、通常あまり時間がとれないALTとの意見交換ややりとりも活発で、楽しそうであった。

今回のように、教員研修で教員がCLILの授業を体験することにより、より多くの小学校でCLILを実践する機会が増えるであろう。

教科内容をよく知る担任教師だからこそ、色々な視点でCLILを使えるという面があるのではないだろうか。今後もこのような研修があれば、小学

校教師がアイデアを出し合い、楽しいCLIL授業を創ることにつながるであろう。

注

- 1) 英語教育の中で語学教師が単発的に英語と母語の両方を用いて行うCLILはSoft CLILと呼ばれ、欧州諸国でカリキュラムに組み込まれ教科担当教員が英語のみを用いて行うHard CLILとは区別されている。(池田2013)。

引用文献

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010) . *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge UP.

池田真 (2013) 「CLILの原理と指導法」『英語教育』 6月号, 10-14. 大修館

藤原真知子・相羽千州子 (2015) 「小学校3年生のCLIL実践 - 理科と英語の連携 - 」『聖学院大学総合研究所 Newsletter』 24 (3), 28-31.

(ふじわら・まちこ 聖学院大学総合研究所特任講師)